

短 報

聖路加国際病院脳神経外科病棟における 看護ケアの質向上を目指した看護教員の活動報告

—アンケート調査結果から（第2報）—

大久保暢子¹⁾ 横山映理子²⁾ 本田 佳子³⁾

Second Report of Nursing Instructor Activity for St. Luke's International Hospital Quality Improvement in Nursing Care in the Neurosurgery Ward —Based on Questionnaire Results—

Nobuko OKUBO Ph.D, RN, PHN¹⁾ Eriko YOKOYAMA, BSN, RN, PHN²⁾
Yoshiko HONDA, BSN, RN, PHN³⁾

[Abstract]

A report was composed based on the results of a questionnaire about the activities of a nursing instructor who aimed to improve the quality of care at the Neurosurgery Ward in St. Luke's International Hospital. An assessment of the nursing instructor's activities and their meanings in the clinical setting were reviewed.

The questionnaire was given to nurses, nurses' aides, and different professionals in the neurosurgery ward, as well as nursing administrators from outside the neurosurgery ward. The questionnaire items concerned attributes, changes in nurses' activities/duties/approaches, the nursing instructor's activities, and activities expected from the nursing instructor.

The response rate for the ward nurses was 56%, and 63% for all others. The majority of respondents felt positive about the nursing instructor's activities. The ward nurses indicated that their duties and approaches changed due to the nursing instructor's activities, and felt positive about the timely bedside explanations and support the nursing instructor provided. Most of the different professionals were unaware of the nursing instructor's activities.

Thus, going forward it becomes important to clearly express activity outcomes. In addition, in the future there is a need to systematically implement the nursing instructor's ward activities and assess the instructor's ward activities as the curriculum is assessed.

[Key words] nursing instructor, nursing practice skills, nursing care, education practice skills, management skills

[要 旨]

聖路加国際病院脳神経外科病棟における看護ケアの質向上を目指した本学看護教員1名の活動をアンケート調査結果から報告し、活動の評価と看護教員が臨床で活動する意味を考察した。

アンケートは対象病棟の看護師及び看護助手、多職種、対象病棟以外の看護管理者に行った。調査項目は、属性、看護師の活動や業務・考え方の変化、看護教員の活動内容、期待する看護教員の活動等であっ

1) 聖路加国際大学 基礎看護学 St. Luke's International University, Fundamental of Nursing

2) 聖路加国際病院 ナースマネージャー St. Luke's International Hospital, Nurse Manager

3) 聖路加国際病院 アシスタントナースマネージャー St. Luke's International Hospital, Assistant Nurse Manager

た。結果、回収率は病棟看護師は56%，それ以外の職種で63%であった。回答者のほとんどが看護教員の活動に対して肯定的であった。病棟看護師は、看護教員の活動によって業務や考え方が変化したと答えており、ベッドサイドでタイムリーに説明や支援をしてくれることに肯定的であった。多職種は看護教員の活動を知らない者も多く、今後、活動成果を明示していく重要性が高まった。加えて、看護教員の病棟での活動を制度化すること、科目評価同様、教員の病棟活動評価も今後必要である。

〔キーワード〕 看護教員，看護実践能力，看護ケア，教育実践能力，マネジメント能力

I. はじめに

昨今、看護系大学における臨地（床）と教育の連携強化が強調されており、看護教員と病院看護スタッフとの連携が今まで以上に重要視されている¹⁾。筆者は、2年半前より、聖路加国際病院脳神経外科病棟に週2～3回程度、病棟に赴き、病棟の看護ケアの質の向上のためのワーキングチームの活動支援、勉強会実施による最新情報の提供、研究支援、病棟の業務改善の支援などを行っている。

この2年半の活動の概要は、第1報²⁾で報告した。本報では、病棟に関わる看護師、他職種を対象に調査した本活動に対するアンケート結果を報告し、第1報の結果も踏まえて、本活動の評価と看護教員が臨床で活動する意味を考察する。

II. 報告の目的

聖路加国際病院脳神経外科病棟における看護ケアの質向上を目指した本学看護教員1名の活動をアンケート調査結果から報告し、調査結果をもとに本活動の評価と、看護教員が臨床で活動する意味を考察する。

III. アンケートの調査方法と倫理的配慮

1. アンケート対象

- a. 聖路加国際病院脳神経外科病棟に勤務する看護師及び看護助手
- b. 同病棟の患者を対象に活動している医師・コメディカル（理学療法士，言語療法士，作業療法士等）
- c. 対象病棟以外の看護管理者

2. アンケート調査項目と分析方法

アンケート調査用紙は、上記対象a用と対象b，c用の2種類作成した。対象a用の調査項目には、回答者の属性、直接的な患者ケア、ワーキンググループの活動や業務の変化に関する内容を主に2件法と自由記述で問い、計12問で構成した。対象b，c用の調査項目は、回答者の属性、看護教員（以下教員と称す）に期待する

内容と現実の活動内容、病棟看護師の変化に関する項目を主に2～3件法、自由記述で問い、計13問で構成した。分析方法は、単純集計を行い図表化した。

3. 倫理的配慮

アンケートは、教員本人でなく第3者から対象者のメールアドレスもしくは直接、配布した。アンケート調査用紙の表紙に、回答の自由、匿名性の保持、プライバシーの保護を記し、加えて各対象者のアンケートの回答の有無と回答内容が看護管理者や教員には公表されないこと、アンケート調査結果は、量的データとワープロ文字になった時点で教員が初めて目を通し、分析後に短報として報告すること、疑問や質問などの連絡方法を記載し、これらに同意した対象者だけが回答し投函することとした。回収方法は、病棟に回収箱を設置し、各人が自由に投函できるようにした。回収箱の回収と開封は、業者に依頼し、アンケートの集計とワープロ文字と量的データになるまで教員の目に直接入らないようにした。

IV. 結果

1. 対象aに対する調査結果

回収率は、25人中14人の回収で56%であった。このうちワーキングチームに属している看護師は、14人中8人（57%）であった。調査項目「教員が病棟に通うようになり、病棟看護師の患者ケアが変わったと思うか」に対して、14人中全員（100%）が「はい」と答え、理由は、「抑制を外す傾向になった。患者ケアに対して深く考えるようになった。業務だけではなく患者のADL向上を考慮したケアに目を向けるようになった。より個別性のケアができるようになった。アセスメント能力が向上した」であった。調査項目「病棟における教員の活動は、あなたが期待するものであるか」に対して、14人中全員（100%）が「はい」と答え、理由は「ワーキングチームで指導や助言がもらえる。教員が患者ケアを全てするのではなく、看護師に働きかけて一緒に活動してくれる。丁寧にタイムリーにケアや業務の相談に乗ってくれる。ケアや業務改善のことを具体的な例を示して分かりやすく説明してくれる」であった。調査項目「ワーキンググ

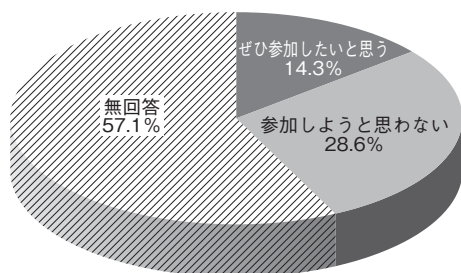


図1 ワーキングチームに今後参加しようと思うか？

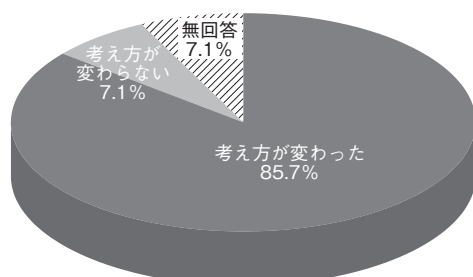


図2 ワーキングチームが作られたことで、あなたの看護に対する考え方が変わったか？

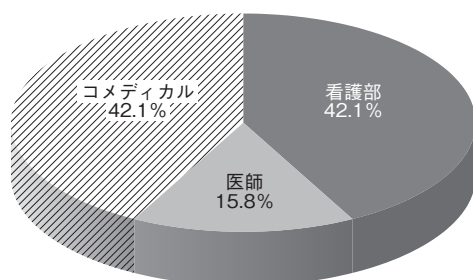


図3 職種別の回収率

ループに今後、参加しようと思いますか？」に対しては、図1の通りであった。さらに「ワーキングチームが作られたことで、あなたの看護に対する考え方が変わりましたか？」の調査項目については、図2の通り、約9割が「変わった」と答えており、理由は「限られた勤務時間の中で、いかに患者を主体として看護を行うのかを考え直すきっかけとなった。患者ケアで患者が良くなる実感を持てた。多忙の中、時間を割いてケアするのは無理と思っていたが、やってみるとできるものだし、患者が良くなるのを見るとやってよかったと思う。業務をこなすだけではなく考えてケアできるようになった。より専門的な看護を追求できるようになった」であった。

2. 対象 b, c に対する調査結果

調査用紙30部配布のうち19部の回収で、回収率は63%であった。職種については図3の通りであった。調査項目「病棟における教員の活動は、あなたが期待するものであるか」に対して、19人中9人(47.4%)が「はい」と答え、それ以外の10人(52.6%)が「分からない」と答えた(表1)。「はい」と回答した理由は「病

表1 病棟における看護教員の活動は期待する内容であるか？

	はい	いいえ	分からない	無回答	合計
回答数	9	0	10	0	19
(%割合)	47.4	0.0	52.6	0.0	100

表2 ワーキングチームは病棟に良い影響があると思うか？

	はい	いいえ	分からない	無回答	合計
回答数	15	0	4	0	19
(%割合)	78.9	0.0	21.1	0.0	100

表3 看護教員が病棟に通うようになり、病棟看護師の患者ケアが変わったと思うか？

	はい	いいえ	分からない	無回答	合計
回答数	2	2	14	1	19
(%割合)	10.5	10.5	73.7	5.3	100

棟のケアとリハビリといった各部門を繋げている、看護師への研究支援、共同研究をしている」であった。「分からない」と答えた理由は「教員の活動自体を知らなかった。何をしているかまでは伝わっていない」の内容であった。「ワーキングチームは病棟に良い影響があると思いますか？」の調査項目については、「はい」が19人中15人(78.9%)、「分からない」が4人(21.1%)であった(表2)。「はい」と答えた理由は「患者の病態の理解に役立つ、看護師のケアの質の向上が望める、ケアや自分の仕事に対するリフレクションの機会がある、ケアの均一化が望める、科学的な方法でこれまでのケアや業務を見直すことができる」であった。さらに「教員が病棟に通うようになり、病棟看護師の患者ケアが変わったと思うか？」に対しては、「はい」が19人中2人(10.5%)、「いいえ」が2人(10.5%)、「分からない」が14人(73.7%)であった(表3)。この調査項目の自由記載として、「教員が活動していることを知らなかった。活動しているのは知っているが何をしているのか知らなかった」という理由が認められた。最後の質問として、今後、一般的に教員の病院での活動、役割として期待する内容を尋ねてみたところ、表4の内容が挙がった。

V. 考察

アンケート結果から、教員の病棟看護師に対する働きかけについては、ワーキングチームの活動も含めて、看護ケアや看護に対する考え方が変わったことで比較的肯定的に捉えられていることが分かった。これについては、理由の自由記載に、「患者ケアを看護師と一緒にしながら相談のしてくれる、ケアや業務について具体例を用いて丁寧に説明してくる」といった内容があることか

表4 病院での活動・役割として、今後、本学大学教員に対して期待する内容

- ・実務の学問的背景の理解を深めるよう指導してほしい。
- ・当院の就職に繋がる学生教育をしてほしい。
- ・研究は、臨床看護師と共同研究の形をとり、臨床看護師の研究的な力を養ってほしい。
- ・臨床実践をエビデンスとして、言語化・見える化してほしい。
- ・学会等への参加を促す助言をしてほしい。
- ・検討会や学習会の共同開催をする。
- ・大学教員は、現場からの問題点を集約し、それを研究、発展させていくことが重要。研究室の中での机上のデータ解析では、本当の意味での臨床研究にならない。
- ・大学教員は、研究を中心に臨床と教育を兼ねた実践的活動に重きを置き、次への問題解決への指針としてほしい。
- ・脳神経系の評価・アセスメントに関して、リハスタッフにも教示できる機会があれば良い。
- ・大学教員として研究は大事だが、臨床現場は時々刻々と多様に変化している。かつて臨床にいたからといって、それが全て通じるものではなく、常に臨床現場と関係した立場に居てほしい。研究者の中には、全てを理解したかのように論じる指導者もいるが、現場はそれを期待していない。
- ・リハビリテーションとの連携や情報共有が、今後より充実したものになれば良い。

ら、実際の患者ケアをベースに十分な時間を看護師と共に共有しながら指導したことが功を奏したと考える。病棟看護師は、目の前の患者に看護ケアを提供することが主の仕事であり、それに悩み、考えながら日々ケアを行っている。机上の口頭説明ではなく、ベッドサイドにおけるリアルな現実を題材に看護ケアを検討していくことが重要である。そして看護師は、実際に検討した看護ケアを患者に提供し、有益無益を体験しながら新しい看護ケアの習得や考え方の転換が行われていくはずである。そのプロセスに教員が臨むことは、教員の役割の1つと捉えてよい。そのためには、教員が定期的に病棟に出向き、十分な時間を取る必要があり、それを可能とするための教員自体の業務バランスの転換、就業制度の改善が必要と考える。また病棟の多忙さは刻一刻と変化し、看護師の業務やケア量も刻一刻と変化する。そのため、変動の多い病棟の中では、看護ケアや業務改善、考え方の転換を急ぎ求めるのではなく、細く長く、じっくり病棟看護師と関わるのが大切であり、教員のペースではなく病棟のペースの中で取り組む必要がある。寺島⁴⁾は、「業務改善を行う際の変化を握る鍵は、病棟で行動に移すタイミングを計ること、場を読むことで効果的な行動を取る」ことであるとしている。筆者も病棟での業務や看護ケアの改善には、場を読み、行動に移すタイミングを見るために病棟での滞在に十分な時間をとることにしている。

多職種や看護管理者からのアンケート結果では、教員の病棟における活動を把握している回答者からは肯定的意見が示されていたが、回答者の半数程度は、「活動自体を知らない、活動していることは知っているが活動内容は知らない」という状況であった。本活動を他看護教員の活動に繋げていくためにも、周囲に分かるように活動報告をする必要がある。また本活動のほとんどは、本学教員として活動している。そのため学部・大学院教育、研究活動と同様、教員の勤務活動として成果報告する義務がある。また学生からの科目評価と同様、病棟における教員の活動評価も病棟看護師などから受ける必要があると考える。井部³⁾は、「今後の看護教員のあり方に関

する検討会報告」の中の「看護教員に求められる能力」として、教育実践能力、コミュニケーション能力、看護実践能力、マネジメント能力、研究能力を挙げている。これらすべてが本活動で大きく養われていると感じる。第1報²⁾では、教員の看護実践能力の向上、研究支援、病棟の業務改善といったメリットが示されたが、本アンケート結果から、多職種への交渉や調整の活動を行うことで病棟の患者ケア向上に繋がっていることが分かった。今までの教員の活動では味わえないマネジメント能力やコーディネーター能力を伸ばす機会となっている。

今後の課題は、病棟における活動に際して、教員の看護学部側、病院側が何を求めているのかを今以上に把握し、それも考慮しながら、活動する必要がある。また活動成果を公表していくこと、病棟との共同研究を積極的に遂行していくこと、本学教員の病棟での活動を制度化していくことが必要である。

Ⅵ. おわりに

第1報に引き続き、本報告は、聖路加国際病院脳神経外科病棟における看護ケアの質向上を目指した看護教員1名の活動を、アンケート結果をもとに報告した。調査結果では、看護教員の活動を肯定的に受け止めている傾向がうかがえたが、肯定的な者だけが回答した可能性は否めない。この点が本報告の限界といえる。しかしながら、病棟における看護教員の活動には教員・看護師双方でメリットがあると考えられ、推進できる活動である。今後は科目評価同様、病棟活動評価を取り入れ、活動の検討をしていくこと、本学で活動を制度化していく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 一般社団法人日本看護系大学協議会. (2013). 平成24年度事業活動報告書, 一般社団法人日本看護系大学協議会.
- 2) 大久保暢子. (2015). 聖路加国際病院脳神経外科病棟における看護ケアの質向上を目指した看護教員の活

動報告—1 教員の事例から（第1報）—，聖路加国際大学紀要，1(1)，10頁。

3) 井部俊子．(2010)．今後の看護教員のあり方に関す

る検討会報告，日本看護管理学会誌，14(1)，26-29.

4) 寺島ひとみ．(2009)．業務改善に取り組む看護師長の暗黙知，日本看護管理学会誌，13(1)，67-75.